

2011年12月27日【外為Lab】松田哲

タイトル：【2012年のドル/円相場】

2012年のドル/円は、現在の70円台後半に張り付いた膠着状態からようやく抜け出すと見えています。

俯瞰してみれば「ドル高」傾向が強まり、トレンド転換する可能性が高い、と考えています。

『なぜドル高と考えるのか?』は、ユーロ/ドルの関係（関連・影響）で、そう判断しています。

まずドル側の要因としては、米政府やFRBの政策によって、サブプライム・ローン問題、リーマン・ショック後の低迷から抜け出す兆しが見えてきたことがあげられます。

ユーロ側の要因では、欧州危機は一段と深刻さを増してユーロ安の圧力が高まりそうです。

欧州経済を支えるドイツも、金融政策を司るECB（欧州中央銀行）も、自身を犠牲にしなければならぬ根本治療に踏み込むことができないでいるからです。

例えば、ドイツがギリシャの債務を肩代わりすれば欧州危機は解決するのですが、ドイツ国民の賛同を得られるわけがありません。

結果、対症療法を続けるしか無く、ユーロの毀損が進行します。

ユーロ/ドルは下落方向へ向かい、その影響でドル/円には上昇圧力がかけられます。

（＝ユーロ/ドルで、「ユーロ安ドル高」になれば、ドル/円にも「ドル高圧力」がかけられます）

だからといって、ドル/円が一気にトレンド転換を果たすわけではない、と考えています。

トレンド転換のシナリオは、2パターン考えられます。

まずは円高方向に大きく動き70円台前半、あるいは70円台を割って60円台を見てから、その揺り戻しの力でトレンド転換を果たすパターンです。

それも一度とは限らず、二度三度と「超円高」に振れてから底打ちして、それから円安に向かうのかもしれない。

もう一つのシナリオは、このまま半年、1年と膠着状態が続いて煮詰まったところで、ようやく円安方向へ動き出すパターンです。

投資家は為替介入を警戒してドル/円を売ることがためらっています。

かといって介入を期待して買うこともできません。

2011年に繰り返し行われた介入の結果を見れば分かるように、ドル/円を担ぎ上げて一気にトレンド転換させるほどの効果は、介入に期待できないからです。

これでは投資家は手の出しようがなく煮詰まるのを待つかありません。

クロス円については「円高」方向と予想しています。

ドル高の進行による円安圧力よりも、ユーロの毀損によるユーロ安圧力のほうが強く、ユーロ/円は下落傾向が続くことになる、と考えています。

(2011年12月27日東京時間13:20記述)